

# 戦前日本における中等学校競技大会の展開 —朝日新聞社編『運動年鑑』(1919-1943)を資料として—

中澤篤史<sup>1)</sup>, 鈴木楓太<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 早稲田大学

<sup>2)</sup> 京都先端科学大学

キーワード: 運動部活動, 校友会, 歴史, 大正期, 昭和戦前期

## 【抄録】

学校の運動部活動は日本のスポーツ文化を支える土台である。しかし近年、その運動部活動の過熱化が社会問題となっている。この過熱化の背景には、運動部活動の中心的なイベントである競技大会のあり方が関係している。こうした競技大会のあり方の原型は、戦前の旧制中学校などの諸大会に見られる。筆者の問題関心は、その展開を分析することで、運動部活動の過熱化の歴史的背景を理解することにある。

先行研究によると、日本の運動部活動が戦前から活発に行われていたことは知られているが、その競技大会の歴史は未だ十分に明らかになっていない。そのため、いつごろ、どのような競技大会がどのような団体によって開催されたのか、といった問いに答えられない。

そこで本研究は、戦前期に中等学校競技大会がどのように展開したのかを、朝日新聞社編『運動年鑑』(1919-1943)を資料として記述することを目的とした。

分析の手続きとして、まず『運動年鑑』に掲載された競技大会の情報を整理し、その中から中等学校(中学校・師範学校・高等女学校・実業学校)の校友会・運動部活動の所属生徒を対象とした競技大会を抽出した。その上で、それら競技大会の特徴を知るために、開催日、大会名、開催範囲、主催団体の情報を取り出して分析した。

得られた知見は次のようにまとめられる。『運動年鑑』に掲載された中等学校競技大会の数は、1918年度から1942年度までに、26競技1万245大会であった。時代ごとの変化を見ると、1910年代には少なかったが、1920年代に急増し、1930年代前半にもっとも多くなり、1930年代後半から減少していった。

こうした全体のプロセスを競技大会の開催範囲と主催団体の観点から分析すると、その展開には、複数および単一の道府県大会の増加/減少と、競技連盟主催および学校主催の競技大会の増加/減少が反映していたことがわかった。

以上で明らかになった中等学校競技大会の量的傾向は、いくつかの先行研究で指摘されていた戦前のスポーツ全体の盛衰を、中等学校競技大会数の変化という量的データから支持し、補強するものである。

スポーツ科学研究, 17, 44-61, 2020年, 受付日:2019年12月3日, 受理日:2020年7月25日

連絡先: 中澤篤史 早稲田大学スポーツ科学学術院 nakazawa.atsushi@waseda.jp